夕日が波間に帰すまでに

しろめのくろねこ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夕日が波間に帰すまでに

【Ｎコード】

Ｎ７０８５Ｋ

【作者名】

しろめのくろねこ

【あらすじ】

スペインとロマーノ（少）が夕暮れの浜辺で青春の汗（またの名は涙）をながす物語

「まてよスペイン」
「はよしいや、ロマーノ」
海岸沿いの浜辺は夕日が沈む予兆を感じさせる強い光に満ちていた
「まちやがれ」
「はいはい」
わいは苦笑いで後ろを振り向いた
ロマーノはちっこい足ではふはふと息を切らして追いついくる
「歩くのおそいで、自分」
「お前が早いんだっ！！」
そうかいな、とわいは自分でも驚くほどぼんやりした声で呟く
ロマーノはわいのふくらはぎをげしげしと蹴りながらいった
「？おいスペイン、なんかお前今日変だぞ？」
「いたいって」
まぁ、しょーじきいえば容赦のない蹴りといえど子供の蹴り。さほど痛くはない

「あははは、弱っちいなぁ！！スペインは…」

痛くはないが
今は、やめてほしい

「いい加減にしいや」

それはとても固い声で。

はっと気づいたときにはもう遅かった

ロマーノは、あはは…と笑うのを止めて途端に目にいっぱいの涙を浮かべる

そして
ぴぎゃあああ

決壊した

「あぁ、あかんわ…ゴメン、ごめんなロマーノ」

頭に手を乗せようとすると手足をばたつかせていやがる。

ため息をついた

ロマーノはぐずぐずと鼻をならしながらわいの手をはじいて波打際

に駆けていった

「奥まで入ったらあかんで！！」

無視されたが、波自体を怖がっているようなのでわざわざ溺れるような危険な場所まで行かないだろうと楽観的に思った

防波堤に腰掛け、ふと先程手を振り払われたことに少なからずショックを受けていたことに気づく

「あほやなぁ、わい。なに子供相手にムキになっとんや」

わいは笑い声をあげた

その声は乾いてて。

なんや自分の声オッサンみたいやんか、かっこわる…

オレンジ色の海をから生暖かい風がわいの前髪を弄ぶ

それとともに、忘れたい今日の出来事が頭を掠めた

『ロマーノを独立させる！？どないなことでっか』

『あれはスペインにもう置いておけない。よく食う上に雑用も満足に出来事ないならば、ただの穀潰しじゃないか。』

『そ、それはそうかもしれへんけどあいつはまだ子供で…』
『オーストリアの所のヴェネチアーノの方はしっかりとやっているそうじゃないか』
『せやけど』
『言い訳はいい。まったく、何故お前は役立たずなほうを連れて帰ってきたんだ』
『なっ！！』
『もうたくさんだ、帰り給え』
『…っ、はい』

「くぅ～、何度思い出しても腹立つなぁ、あの馬鹿上司は！！」
わいはぎりぎりと歯ぎしりした
「ロマーノにはロマーノのええとこがぎょうさんあんのや」
例えば？
もう一人のわいの声
トマト好きなとこ！
…それは個人の問題やん

黙ってれば見た目も可愛いで！

…だからなんやねん

女を見る目はあると思うん！

…や、あいつまだ子供やしな

わいを好いとってくれとる！

本当に？

え

本当に自分、ロマーノに好かれとるん？

わいは慌ててもう一人の自分を消そうとする

当たり前やん。ラブラブやでわいらは！！

ほーん、まぁ確かに頼ってはくれとるよな

もう一人のわいはそこで目を閉じて、可笑しそうに笑った

なんやねん、自分…

じゃあもう一個聞いてええか

いやや…

自分はさぁ

言わんといて、たのむ

ロマーノのこと

違う、ちがう、チガウ！！

ホンマに必要だと思ってるん？

「消えろっ！！…うわっ」

防波堤からバランスを崩しておちた。下が砂でよかった

深く息をつき動悸をおさえる努力をする

数回繰り返しやっと落ち着いてくれたようだ

ぽりぽりと砂にダイブしてしまったせいで粉っぽい頭皮をかく

なんや、リアルな脳内会議やなぁと思ったらまどろんでいたみたいだ

頭に鈍痛がする

ああ、やな夢やったなぁ

見上げれば夕日はじりじりと音が聞こえそうなほど燃え上がり、端っこは既に水没しかけていた

「わいは心の奥ではロマーノのこと、そないに思っとるんかな」

太陽につぶやいても、答えなど帰ってきやしない

わかっていても、つい弱音がでてしまう

ふと気づく

強がりの小さな子分はどこだ

「…！？あれ、ロマーノどこ行きよったあいつ」

海岸沿いに人の姿は見当たらない

大変や

わいは落ちた衝撃で痛めたらしい足首を強引に持ち上げ走り出した

「ロマーノ！！おーい」

岩影にはいない

「どこにおるんー」

近くの閉まっている物売り小屋にはいない

「でてきいやぁー」

パラソルの下にも椅子の下にもいない

「ロマーノぉ！！」

いない、いない、ロマーノが

ドコニモイナイ

「…溺れた？」

まさか、そりゃないやろ

口元が引き攣る

「ないない！！怖がりロマーノが水ん中はいってくなんてな…」

白いものが見えた

「嘘やろ」

白いものが見えた

「嘘やっ！！」

わいは必死で目をこらす

遠すぎてよく見えないが、ロマーノはいつものフリルのついた服に

エプロンをしていたはずだ

エプロン？

しろい、エプロン…

「まっとけよ、ロマーノ」

「ばかか」

「あ？」

ばしゃぁああん

勢いづいた体は急には止められず慣性の法則にしたがって浅瀬に崩れ落ちた

「いったぁああ、まじ痛っ」

再び足を捻りもんどりうつわいをロマーノは冷ややかな顔で見下ろしていた

「スペインお前はビニール袋とおれの見分けもつかないのか！」

「お前、どこにいたん！！めっちゃ心配したで」

「ほんとかよ」

「は、なにをいって」

当たり前やろ、とわいは怒鳴ろうとして息を吸い込む

「いなくなっちまえばいいって、思わなかったのか」

「っ！？」

さっきお前の真後ろにいたんだ、とロマーノは言った

そうか。わいは少し焦った

防波堤の裏にいたのか…じゃあうなされて呟いていただろう言葉の切れ端は

「聞こえちまったよ全部」

体を起こすこともできず、ロマーノを見上げることしかできない

ロマーノは泣いていない

ただぎこちなく作り笑いを浮かべている

似合わない、お前にそんな顔

「あーあっ、おれだってお前のこと嫌いだしっ。出ていってやるよ、すぐにでも」

ロマーノはじゃあな、と軽くいって走り出した

遠ざかる背中にわいは小さく呟いた。あばよ、愛しき子分

「…って、させるかぁ！！」
「ぴぎゃあああ」

わいは最後の力を振り絞りロマーノの右足首をつかまえた

「こっちおいでぇえええーロマぁーノちゃぁぁあんっ」

「ぴぎゃああ、スペインこえーよ、こえーよ…」

無理矢理抱きしめた
すでにわいは水浸しやからロマーノも濡れてまうなぁ、とどこか投げやりな気持ちで思った

「なんだよ、何なんだよ！！」

腕から抜けようともがくのを頭を押し付け、ロマーノの強張ったほほを引っ張る

「にゃんなんひゃお、もぅ」

えっぐと静かに嗚咽する
いつもの破壊的な泣き声でなく、絞りだすかのような苦しげな泣き声

「ロマーノは馬鹿やなぁ」

「おみゃえにっぐ、いわっ、れたくにゃい」

そやなぁ、と苦笑い

「わいが悪かった。今日のは全部わいがほんまいけんかった」

ロマーノがすんだ目で問い掛けてくる。本当にそう思っているのか、と。

たまらず目を逸らし、こほんと咳ばらいをした

「あんなぁ、わい正直、お前にもっとしっかりしてほしいわって思っててん」

「…」

ロマーノは自覚があるのか俯いてしまう

「でもな、お前、やっぱそのままでええよ」

「え。」

顔を上げた瞳とぶつかる

とろけそうなほどのオレンジ色に染まる涙

夕日とおんなじだ

「いま思ってん。ロマーノいなくなったら、こないな気持ちになるんやなぁって」

「お前…泣いてるぞ」

ロマーノの小さい手がわいの頬を往復した
なんや、安心してもうたんかな
かっこわる…
「からっぽになったかとおもったわ、お前がいなくなって。」
どうせかっこわるいなら
「他のお偉方がなんていったってな」
全部みててくれ
「イタリアちゃんがどれだけ有能だろうとな」
ロマーノ
「おまえがええんよ」

わいはロマーノに馬鹿にされるのを予想して胸に次の苦笑いを用意していた
だから、思わなかった
「おれだって、しょうがないから、おまえでいい！！」

自分を肯定してくれる言葉が聞けるなんて
嬉しい予想外に胸が裂けそうになった
やば、また泣いてしまいそや
泣くのを堪えるためにロマーノをぎゅっと抱きしめた
ロマーノは、苦しいといいながらも離せとは言わなかった
わいはそれを許可と受け取り、痛む足首にむちうって歩きだした。
家はそんなに遠くない
「仲直りやな」
「へっ、おれがだきょーしてやったんだからな」
「はいはい」
ロマーノはわいの胸をはい上がり肩にのるとあっというまに肩車の体制になった
「スペイン、夕日だぞ」
夕日は最後の炎を燃やすかのように情熱的な、赤
「トマトの色だ！！」
「そうやな」

ぐきゅううい

「ぎゃはは、スペインだっせ～腹鳴らしてやんの～」

「う、うるさいやっちゃな／／」

きゅるるりぃ

「…」

「な、なんだよ」

「なぁんでもあらへんよ」

わらうなぁー

と顔を真っ赤にして頭を拳でぽこぽことなぐってくる

わいは余計におかしくなってよろけながら走る

大きく揺れて落ちそうになるたびにロマーノの笑い声とわいの笑い声が重なって無人の砂浜にあたたかく響いた

もう一人のわい、いるなら聞いてくれへんか

確かにたわいないと一言で括ってしまえるかもしれへん

けど、

わいは今は極上に幸せや…それだけじゃあかんの？

なぁ、もう一人の自分。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7085k/

夕日が波間に帰すまでに

2010年10月8日12時21分発行